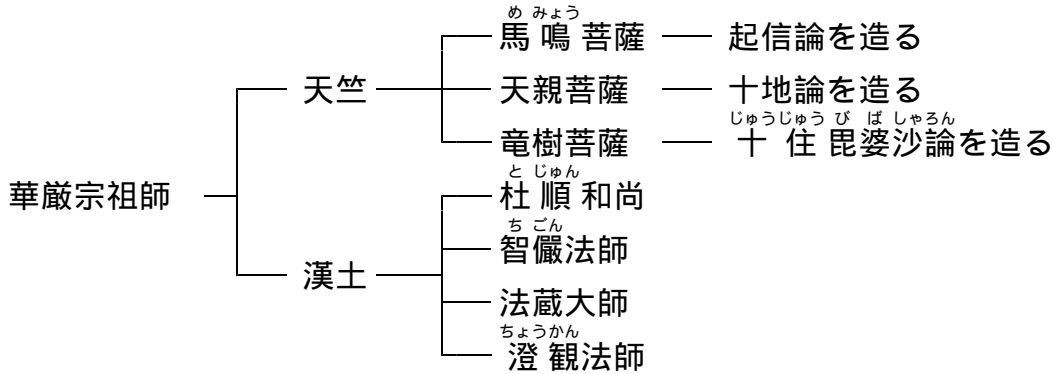
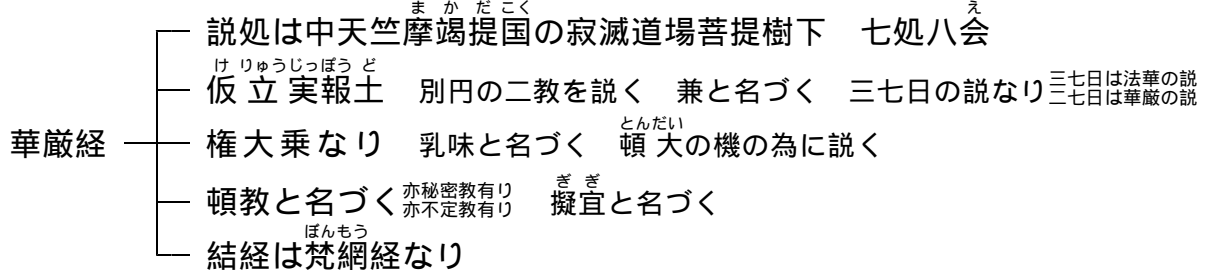
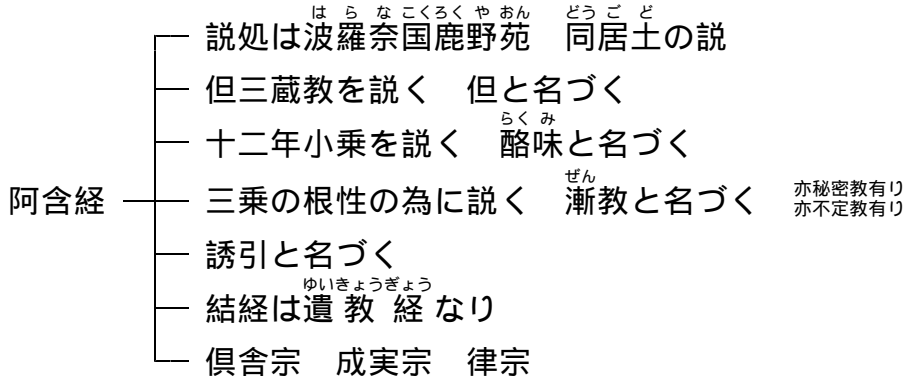


釈迦一代五時継図

大論に云はく「十九出家・三十成道・八十入滅」文。此の論は竜樹菩薩の造、寿命三百年、三十万偈の論師なり。付法蔵の第十三、仏滅後七百年の人なり。

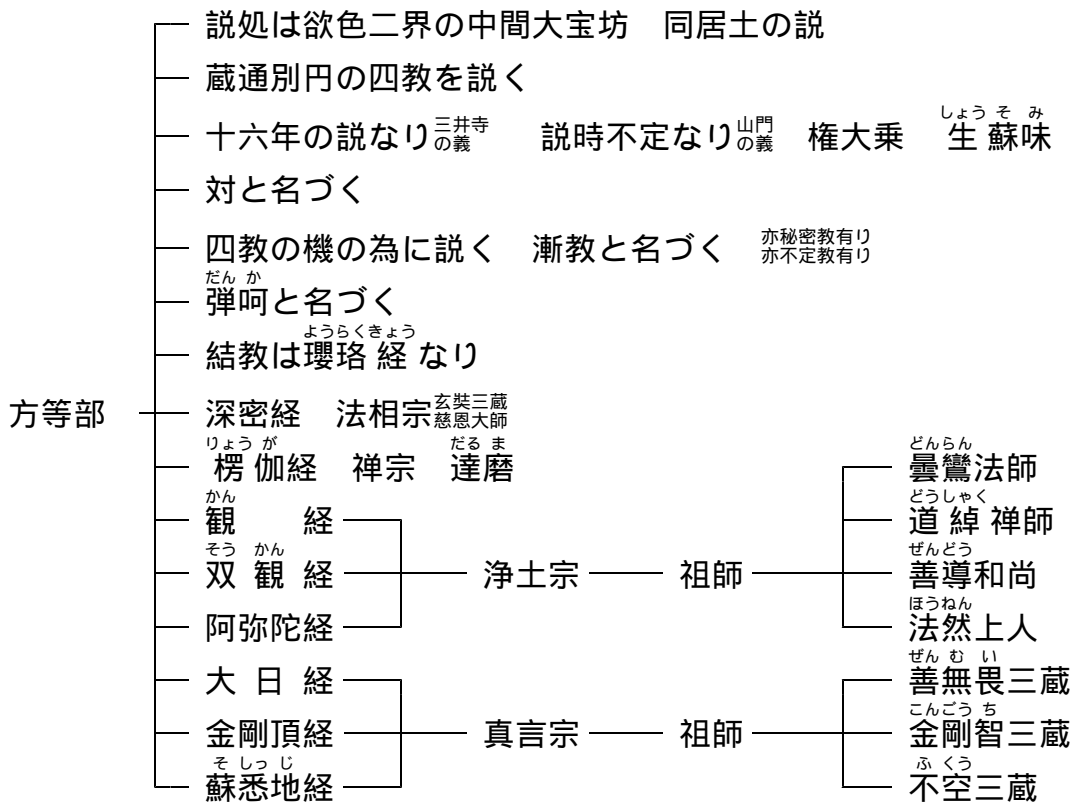


此の華嚴教とは、所謂仏、摩訶陀国寂滅道場菩提樹下にして始めて正覺を成じたまひし時、七処八会に於て、法慧・功德林・金剛幢・金剛蔵の四菩薩を加して、頓大の根性の為に因陀羅網・無障碍土の相を現じて、別円の両教・住行向地の功德・法界唯心の理を説きたまふ。所謂華嚴経なり。此の経には四十一位を明かす。謂はく十住・十行・十廻向・十地・仏果なり。此の経には新古の二訳有り。六十華嚴は旧訳なり。八十華嚴は新訳なり。梵網経を以て華嚴の結経と為す。此の華嚴は、化儀は頓部、化法は別円なり。成道の最初に此の教を説きたまふ。譬へば日出でて先づ高山を照らすが如し。厚殖善根は斯の頓説を感ず。頓説本小の為にせず。彼の初分に於ては永く声聞無し。後分には即ち有り。復座に在りと雖も聾の如く啞の如し。経文に云はく「即ち傍人を遣はして急に追ふて將に還さんとす。乃至、悶絶して地に壁る」云云。

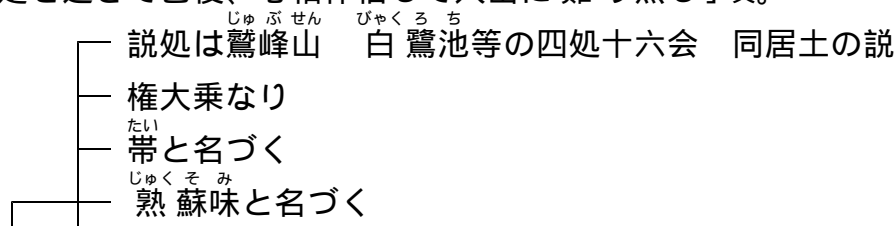


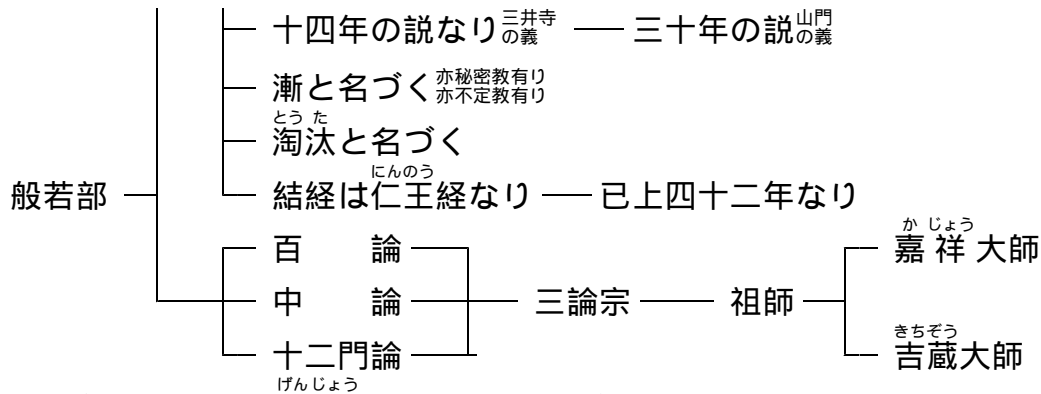
此の阿含は是小乗教なり。仏成道五十七日を経て梵王の請ひに赴き、波羅奈国の鹿

野苑に於て、陳如等の五人の為に三蔵教の四諦の法輪を説きたまふ。謂はく、四阿含等の小乗経を説くなり。増一阿含には人天の因果を明かし、長阿含には邪見を破し、中阿含には真寂の深義を明かし、雑阿含には禅定を明かす。遺教経を以て結経と為す。化儀は漸の部の初め、化法は三蔵教なり。三乗の根性の為に此の阿含の教を説く。経の次第に依れば日の次に幽谷を照らすが如し。浅行を偏に明かせば当分に漸を解る。三蔵本大の為ならず。座に在りと雖も多踰婆和す。経に云はく「將に其の子誘引せんと欲して方便を説く。密かに二人の形色憔悴せる威徳無き者を遣はず」云云。



此の方等教は、謂はく、鹿苑の後般若の前、四教の機に対し処々に四教の法を説いて唯二乗を弾呵し、菩薩を称揚す。所謂密厳経・厚厳経・思益経・方等経・楞伽経・浄名経等なり。瓔珞経を以て結経と為す。化儀は漸部の中、化法は四教なり。説教の次第に依れば日の次に平地を照らすが如し。影万水に臨みて器の方円を逐ひ、波の動静に随って一仏土を示すに浄穢不同ならしめ、一身を示現するに巨細各異なり。一音の説法、類に随って各解なり。恐畏し歡喜し厭離し断疑す。神力不共の故に見に浄穢有り、聞に褒貶有り、嗅に瞻蔔と不瞻蔔と有り、華に著身と不著身と有り。浄名方等の如し。経文に云はく「是を過ぎて已後、心相体信して入出に難り無し」文。





此の大般若経は唐の玄奘三蔵の所訳、是新訳なり。此の経は一部六百卷二百六十五品、六十億四十万字、一万六百三十八紙なり。此の般若経は方等の後、法華の前、四処十六会の中に於て、後三教の機^{こうさんはん}の為に広く諸部の般若を説く。所謂光讚般若経・文殊問般若経・金剛般若経・能断金剛般若経・大品般若・小品般若経・放光般若経・天王問般若経・大般若経等なり。仁王般若経を以て結経と為す。唯化儀^{ただ}は漸教の後、化法は通別円なり。此の般若経の時も二乗の念処道品は皆是摩訶衍と説いて、亦身子・須菩提をして菩薩の為に般若を転教せしむ。

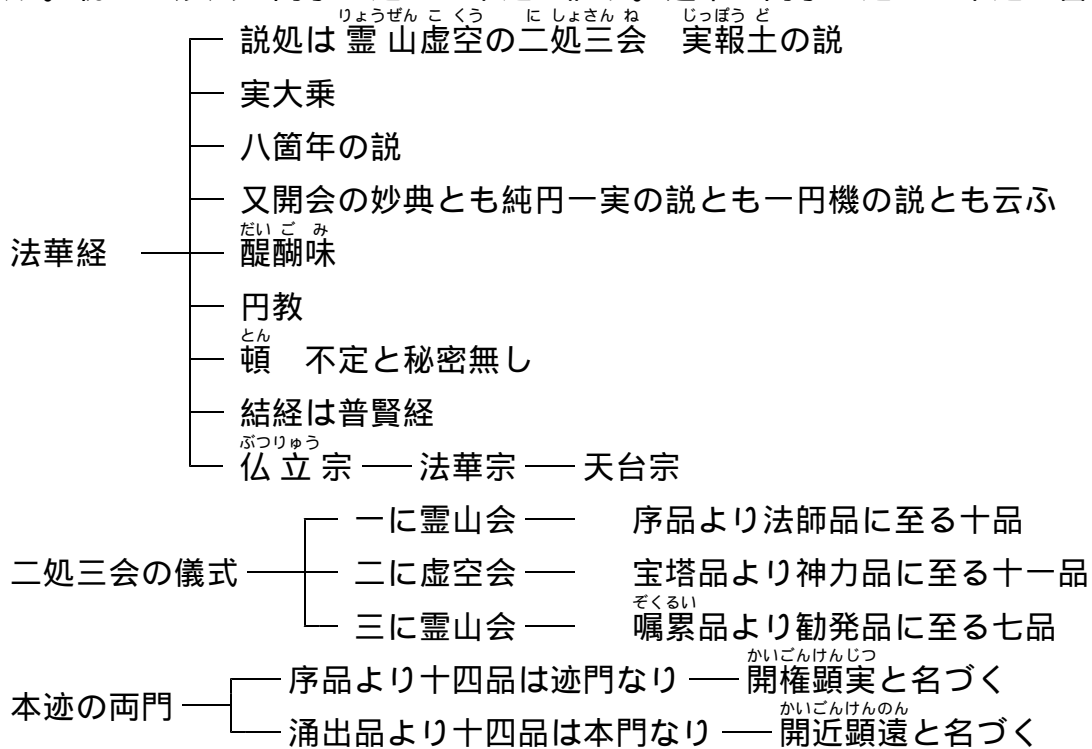
玄義に云はく「大人は其の光用を蒙り、嬰兒は其の精明を喪^{うしな}ふ。夜遊の者は伏匿^{ふくのく}し、作務の者は興盛^{こうじょう}す。故に文に云はく、但菩薩の為に其の實事を説いて、我が為に此の真要を説かず。三人俱^{とも}に学すと雖も、二乗は証を取る。具には大品等の如し」と。経文に云はく「爾の時に窮子即ち教勅^{きょうちやく}を受けて衆物を領知し、乃至、而も一餐^{さん}を恠取^{けしゅ}するの意無し」云云。

仏自ら四十余年の諸経を破したまふ事

無量義経説法品に云はく「我先に道場菩提樹下に端坐すること六年にして、阿耨多羅三藐三菩提^{あんむたらさんみやくさんぼだい}を成ずることを得たり。仏眼を以て一切の諸法を觀ずるに宣説すべからず。所以は何。諸の衆生の性欲不同なることを知れり。性欲不同なれば種々に法を説き、種々に法を説くこと方便力を以てす。四十余年には未だ眞実を顯はさず」云云。又云はく「文辞は一なりと雖も而も義は各異なり」云云。伝教大師の無量義経の注釈に云はく「性欲不同種々説法とは是能被の教を挙ぐるなり。釈迦一代四十余年の所説の教、略して四教及以八教有り。所謂樹王の華嚴・鹿苑の阿含・坊中の方等・鷲峰等の般若、一乗・大小の菩薩の歴劫修行・小乗の三蔵教・大乘の通教・大乘の別教・大乘の円教・頓教・漸教・不定教・秘密教を演説す。是くの如き等の前四味各々不同なり。是の故に名づけて種々説法と為す」云云。又云はく「但随他の五種性等・門外の方便・差別の権教・帶権の一乗を説いて未だ随自一仏乘等・露地の眞実・平等の直道・捨権の一乗を顯はさず。是の故に説いて以方便力四十余年未顯眞実と言ふ」云云。無量義経に云はく「若し衆生有^とつて是の経を聞くことを得るは則ち為れ大利なり。所以は何。若し能く修行せば必ず疾く無上菩提を成ずることを得ればなり。其れ衆生有^とつて聞くことを得ざる者は、

当に知るべし、是等は為れ大利を失ふなり。無量無辺不可思議阿僧祇劫を過ぐれども、終に無上菩提を成ずることを得ず。所以は何。菩提の大直道を知らざる故に。険径を行くに留難多きが故に」云云。注釈に云はく「不得疾成無上菩提と言ふは、未だ直道一乗の海路を解らず、未だ純円六度の固船に乗らず、未だ実相方便の順風を得ず。是の故に横に三乗の嶮路に道き、留難多き処を歩行して妄想夢裏の大河に懃苦す。是の故に説いて不得疾成無上菩提と言ふなり」云云。

秀句の下に云はく「法華經を讚むと雖も還つて法華の心を死す」云云。無量義經に云はく「次に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説いて菩薩の歴劫修行を宣説せしかども」云云。伝教大師の秀句の下巻に云はく「謹んで無量義經を案ずるに云はく、方等十二部經とは法相宗の所依の經なり。摩訶般若とは三論宗の所依の經なり。華嚴海空とは即ち華嚴宗の所依の經なり。但歴劫修行を説いて未だ大直道を知らず」云云。天台大師玄義の五に云はく「成道より以来四十余年未だ真実を顯はさず、法華に始めて真実を顯はす。相伝に云はく、仏の年七十二歳にして法華經を説く云云」と。慧心僧都の一乗要決の下に云はく「仏既に説いて言はく、法華真実なり、前は未だ真実を顯はさず。何ぞ強ちに仏教に背いて法華の怨嫉と為るや」云云。記の八に云はく「略して經題を挙ぐるに玄に一部を収む。故に仏欲以此妙法等と云ふなり」と。釈籤の一に云はく「次に經題を釈す。初めに妙法の両字は通じて本迹を詮す。蓮華の両字は通じて本迹を譬ふ」と。



此の法華經は第五時の教なり。無量義經を開經と為し、觀普賢經を結經と為す。化儀は會漸歸頓、會三歸一、化法は純円なり。般若の後、双林の前、純ら一の円機に対して真実を説くなり。日光普く照らすに土圭の測影、縮ならず盈ならざるが如し。低頭挙手皆仏道を成ず。汝は実に我が子、我は実に汝が父、唯如来の滅後を以て之を滅度

す。此の第五時の教は是日中にして四時に非ず。是醍醐にして四味に非ず。是定にして不定に非ず。是顕露にして秘密に非ず。三乗・五乗・七方便・九法界を会して一仏乘に入らしむ。所以に迹門には二乗初住の位に叶ひて無生忍を得、成仏の記を受く。八歳の竜女は变成男子して即身に無垢の成道を唱ふ。本門には二世の弟子増道損生の益を得。凡そ三周四説不可思議なり。方便品に云はく「世尊の法久しくして後要かならず当に眞実を説くべし」と。又云はく「未だ曾て説かざる所以は説時未だ至らざる故なり。今正しく是其の時なり。決定して大乘を説かん」云云。又云はく「乃至一偈に於ても皆成仏せんこと疑ひ無し。十方仏土の中には唯一乗の法のみ有って二も無く亦三も無し。仏の方便の説を除く」と。又云はく「諸仏世に出づ。唯此の一事のみ実なり。余の二は則ち眞に非ず」と。普賢經の記に云はく「故に正説に云はく、唯此の一事のみ實にして余の二は則ち眞に非ずと。斯れに多くの義有り。一には非頓非漸ひとんひぜんの妙法を指して一実事と爲し、而頓而漸を余二の権と爲す。二には三教の仮名けみょうを呼びて非眞と爲し、一円の実理を指して一実と爲す。三には四味を以て非眞と爲し、醍醐を以て一実と爲す」と。方便品に云はく「終に小乗を以て衆生を濟度せず」云云。又云はく「若し小乗を以て化すること乃至一人に於てもせば、我れ則ち慳貪に墮せん。此の事不可と爲す」と。又云はく「正直に方便を捨て、但無上道を説く」と。玄の九に云はく「廢三顯一とは此正しく教を廢す。其の情を破すと雖も若し教を廢せざれば樹想還つて生ず。教を執して惑を生ず。是の故に教を廢す。正直に方便を捨て、但無上道を説く。十方仏土の中、唯一乗の法のみ有り。二も無く亦三も無し」云云。玄義の一に云はく「華落は権を廢するを譬へ、蓮成は実を立するを譬ふ」と。文に云はく「正直に方便を捨て、但無上道を説く」云云。伝教大師の顯戒論に云はく「白牛を賜ふ朝には三車を用ひず、家業を得る夕には何ぞ除糞を用ひん」と。故に經に云はく「正直に方便を捨て、但無上道を説く」と。方便品に云はく「我が昔の所願の如く今は已に満足す」云云。

玄義の十に云はく「即ち方便の一乗を廢して唯円実の一乗なり。故に云はく、我本誓願するが如き今は已に満足す」と。方便品に云はく「当来世の悪人、仏一乗を説きたまふを聞いて迷惑して信受せず。法を破して悪道に墮せん」云云。又云はく「法を聞き歡喜し讚めて乃至一言も発す、則ち為れ已に一切三世の仏を供養するなり」と。譬喩品に云はく「今此の三界は皆是我が有なり。其の中の衆生は悉く是吾が子なり。而も今此の処は諸の患難多し。唯我一人のみ能く救護を為す」云云。文句の六に云はく「旧は西方の無量寿仏を以て、以て長者に合す。今は之を用ひず。西方は仏別に縁異なり、仏別なるが故に隱顯の義成ぜず。縁異なるが故に子父の義成ぜず。又此の經の首末に全く此の旨無し。眼を閉ぢて穿鑿す」と。疏記の六に云はく「弥陀・釈迦二仏既に殊なり。況んや宿昔の縁別に化導同じからざるをや。結縁は生の如く成熟は養の如し。生養の縁異なれば父子成ぜず。珍弊途を分かち著脱殊に隔たる。消經事欠け調熟義乖く。当部の文永く斯の旨無し」云云。又云はく「往昔は大小の両縁俱に釈迦に在りとし、今は尊特垢衣

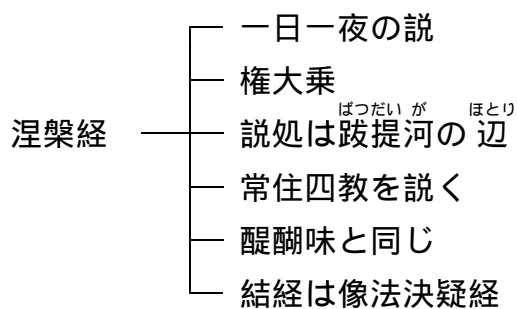
俱に弥陀に在りとせば更に笑ふべきことを成ず」云云。涅槃經疏の一に云はく「無救無護無所宗仰とは此は無主の苦を釈す。貧窮孤露一旦遠離無上世尊とは此は無親の苦を釈す。設有疑惑當復問誰とは此は無師の苦を釈す」云云。涅槃經の四に云はく「我又閻浮提の中に示現し、疫病劫起多く衆生有って病に悩む所と為さんに、去って医薬を施し、然して後に為に微妙の法を説いて、其れをして無上菩提に安住せしむ」云云。涅槃經の一に云はく「我等今より救護有ること無く、宗仰する所無く、貧窮孤露なり。一旦無上世尊に遠離したてまつらば、設ひ疑惑有りとともに當に復誰にか問ふべし」と。同二に云はく「主無く親無ければ、家を亡ぼし国を亡ぼす」と。又云はく「一体の仏を主師親と作す」と。譬喩品に云はく「一切衆生皆是吾子」云云。寿量品に云はく「我常に此の娑婆世界に在って説法教化す。亦余処の百千万億那由他阿僧祇の国に於ても衆生を導利す」云云。大論に云はく「十方恒河沙等の三千の国土を名づけて一仏国土と為す。是の中に更に余仏無し。實に一の釈迦仏のみなり」云云。寿量品に云はく「我亦為れ世の父、諸の苦患を救う者なり」云云。宝塔品に云はく「能く来世に於て此の經を読み持たんは是真の仏子なり」云云。譬喩品に云はく「若し人あつて信ぜずして此の經を毀謗せば、則ち一切世間の仏種を断ぜん。其の人命終して阿鼻獄に入り、一劫を具足して、劫尽きて更に生じ、是くの如く展轉して無数劫に至らん」と。又云はく「但大乘經典を受持することを樂つて乃至余經の一偈をも受けざれ」と。妙樂大師の五百問論に云はく「況んや彼の華嚴は但福を以て比す。此の經の法を以て之を比するに同じからず。故に云はく、乃至不受余經一偈と。人之を思はず、徒に引く。何の益あらん」と。

玄義の五に云はく「究竟の大乘は華嚴・大集・大品・法華・涅槃に過ぐる無し」と。妙樂の釈籤の十に云はく「請ふ、眼有らん者委悉に之を尋ねて、法華は漸円、華嚴の頓極に及ばずと云ふこと勿れ。當に知るべし、法華は部に約するときは則ち尚華嚴・般若を破し、教に約するときは則ち尚別教の後心を破す」と。譬喩品に云はく「初め仏の所説を聞いて心中大いに驚疑す。將に魔の仏と作つて我が心を悩乱するに非ずや」と。宝塔品に云はく「爾の時に宝塔の中より大音聲を出だして歎めて言はく、善きかな善きかな。釈迦牟尼世尊、能く平等大慧教菩薩法仏所護念の妙法華經を以て大衆の為に説きたまふこと是くの如し是くの如し。釈迦牟尼世尊、所説の如きは皆是真實なり」と。又云はく「釈迦牟尼仏、快く是の法華經を説きたまへ。我是の經を聴かんが為の故に而も此に来至せり」云云。又云はく「大音聲を以て普く四衆に告ぐ。誰か能く此の娑婆国土に於て広く妙法華經を説かん。今正しく是時なり。如来久しからずして當に涅槃に入りたまふべし。仏此の妙法華經を以て付囑して在ること有らしめんと欲す」と。法師品に云はく「藥王、若し人有って何等の衆生か未来世に於て當に作仏することを得べしと問はゞ、応に示すべし、是の諸人等未来世に於て必ず作仏することを得んと。何を以ての故に。善男子善女人、法華經の乃至一句に於て受持し誦誦せん」云云。

宝塔品に云はく「諸余の經典数恒沙の如くならん。此等を説くと雖も未だ難しと為る

に足らず。若し仏の滅後、悪世の中に於て能く此の經を説かん。是則ち難しと為す」と。提婆品に云はく「仏諸の比丘に告げたまはく、未来世の中に若し善男子善女人有って妙法華經の提婆達多品を聞いて、淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は、地獄・餓鬼・畜生に墮ちずして十方の仏前に生ぜん。所生の処には常に此の經を聞かん。若し人天の中に生まれれば勝妙の樂を受け、若し仏前に在らば蓮華より化生せん」と。又云はく「當時の衆會皆竜女の忽然の間に變じて男子と成つて、菩薩の行を具して即ち南方無垢世界に往き、宝蓮華に坐して等正覺を成じて、三十二相八十種好あつて普く十方一切衆生の爲に妙法を演説するを見る」と。又云はく「爾の時に娑婆世界の菩薩・声聞・天・竜・八部・人と非人と、皆遙かに彼の竜女の成仏して普く時の會の人天の爲に法を説くを見て心大いに歡喜し、悉く遙かに敬礼す」と。分別功德品に云はく「阿逸多、是の善男子善女人は我が爲に復塔寺を起て、及び僧坊を作り、四事を以て衆僧に供養することを須ひず。所以は何。是の善男子善女人、是の經典を受持し讀誦する者は已に塔を起て僧坊を造立し衆僧を供養すと爲す。則ち爲れ仏舍利を以て七宝の塔を起て、高広漸小にして梵天に至る」云云。神力品に云はく「仏の滅度の後に能く是の經を持たんを以ての故に諸仏皆歡喜す」云云。

又云はく「我が滅度の後に於て應に斯の經を受持すべし。是の人仏道に於て決定して疑ひ有ること無けん」云云。藥王品に云はく「能く是の經典を受持すること有らん者も亦復是くの如し。一切衆生の中に於て亦第一と爲す」云云。普賢經に云はく「煩惱を断ぜず、五欲を離れず、三昧に入らざれども、但誦持するが故に」云云。又云はく「其れ大乘方等經典を讀誦する有らば、當に知るべし、此の人は仏の功德を具して、諸惡永く滅して仏慧より生ずるなり」云云。一經の始めの如是我聞を釈する文句の一に云はく「如是とは所聞の法体を掌ぐ」と。則ち妙法蓮華經是なり。



此の涅槃經は一日一夜の説、三藏經・通教・別教・円教を明かす。亦醍醐味と名づく。釈尊拘尸那城力士生地、阿利羅跋提河、沙羅双樹の間に於て、二月十五日の晨朝、面門より種々の光を放ちたまふ。十二由旬の内十方の大衆を集めて涅槃經を説きたまふ。即ち三十六の涅槃經、旧訳の四十の涅槃經なり。像法決疑經を以て結經と爲す。亦拈捨經と名づけ、亦扶律頭常と云ふ。化儀は漸部、化法は四教なり。法華の時猶未解の輩有り。更に後番五味を以て余残の機を調熟したまふ。涅槃の時四教の機同じく仏性を見る。秋收冬蔵の如し。唯四機有り、俱に常住を知る。故に法華と合して同醍醐味と爲

すなり。凡そ一往此くの如く配立すと雖も、万差の機縁に随って時節の長短不同なり。或は華嚴の時長は涅槃の時に至る。阿含・方等・般若も亦爾なり云云。涅槃經の六に云はく「法に依って人に依らざれ、義に依って語に依らざれ、智に依って識に依らざれ、了義經に依って不了義經に依らざれ」云云。又「亦如来随宜の方便所説の法の中に於て執著を生ぜず。是を了義と名づく。不了義とは、經の中に一切焼然なり、一切無常なり、一切皆苦なり、一切皆空なり、一切無我なりと説くが如し。是を不了義と名づく。何を以ての故に。是くの如きの義を了すること能はざるを以ての故に、諸の衆生をして阿鼻獄に墮せしむ」云云。十七の卷に云はく「如来は虚妄の言無しと雖も、若し衆生虚妄の説に因ると知れば」文。又云はく「虚妄の法則ち是罪と為す。是の罪を以ての故に地獄に墮す」云云。

一 小乗の戒を破する事

涅槃經の三卷に云はく「仏迦葉に告げたまはく、能く正法を護持する因縁を以ての故に是の金剛身を成就することを得。迦葉、我往昔に於て護法の因縁をもって今是の金剛身を成就することを得て、常住にして壊せず。善男子、正法を護持する者は、五戒を受けず威儀を修せず。応に刀劍・弓箭・鉞槊を持ちて持戒清淨の比丘を守護すべし」云云。同十七に云はく「仏性を見るが故に大涅槃を得。是を菩薩の清淨持戒と名づく。世間戒には非ず」云云。又云はく「是の經を受持して戒を毀る者は則ち是衆生の大悪知識なり。我が弟子に非ず。是魔の眷屬なり」云云。法師品に云はく「若し是の深經の声聞の法を決了する、是諸經の王なることを聞いて」云云。安樂行品に云はく「又声聞を求むる比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷に親近せざれ。亦問訊せざれ。若しは坊中に於ても、若しは經行の処、若しは講堂の中に在っても、共に住止せざれ」云云。傳教大師の顯戒論の中に云はく「貧人の食は是輪王の毒なるが如し。故に二乗の者の持戒精進は即ち菩薩の破戒懶惰なり。故に応に親近すべからず。来たらば為に法を説け。親使利養恭敬を悕はざれ」云云。秀句の下に云はく「小乗の持戒は則ち菩薩の煩惱なり」云云。宝塔品に云はく「此の經は持ち難し。若し暫くも持たば我則ち歡喜す。諸仏も亦然なり。是くの如きの人は諸仏の歎めたまふ所なり。是則ち勇猛なり、是則ち精進なり。是を戒を持ち頭陀を行ずる者と名づく。則ち疾く無上の仏道を得と為す。能く来世に於て此の經を読み持たんは是真の仏子なり」云云。竜樹菩薩の大論に云はく「自法愛染の故に他人の法を毀皆す。持戒の行人と雖も地獄の苦を脱れず」云云。涅槃經の十二に云はく「仏迦葉に告げたまはく、若し菩薩有って破戒の因縁を以て、則ち能く人をして大乘經典を受持し愛樂せしむることを知って、又能く其れをして經卷を讀誦し通利し書写し広く人の為に説いて阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざらしめ、是くの如き為の故に、故に戒を破ることを得」云云。安然の広釈に云はく「能く法華經を説く、是を持戒と名づく。律儀を持すと雖も善法を損せざれば、猶木石の衣鉢を帶持せるが如し」云云。弘決の四に大論の十九を引いて云はく「諸の比丘仏に問ひたてまつる。阿蘭若の比丘死しぬ。今

何処にか生ずる。仏の言はく、阿鼻獄に生ずと。諸の比丘大いに驚く。坐禅持戒して便ち爾に至るや。仏答へて言はく、多聞・持戒・禅は未だ漏尽の法を得ず」云云。伝教大師云はく「今より已後声聞の利益を受けず。菩薩は二百五十戒を捨て畢んぬ」云云。涅槃經の四に云はく「我涅槃の後無量百歳に四道の聖人も悉く復涅槃せん。正法滅して後、像法の中に於て当に比丘有るべし。貌持律に像て少しく經を読誦し、飲食を貪嗜し其の身を長養す。袈裟を服すと雖も猶獵師の細視徐行するが如く猫の鼠を伺ふが如し。常に是の言を唱ふ、我羅漢を得たりと。諸の病苦多くして糞穢に眠臥す。外には賢善を現はし内には貪嫉を懷く。啞法を受けたる婆羅門等の如し。実に沙門に非ずして沙門の像を現じ、邪見熾盛にして正法を誹謗し、及び甚深秘密の教を壊して各自ら意に随つて經律を説く」云云。同九に云はく「善男子、一闍提有り、羅漢の像を作し、空処に住して方等大乗經典を誹謗す。諸の凡夫人見已はって皆眞の阿羅漢なり是大菩薩摩訶薩なりと謂へり」と。

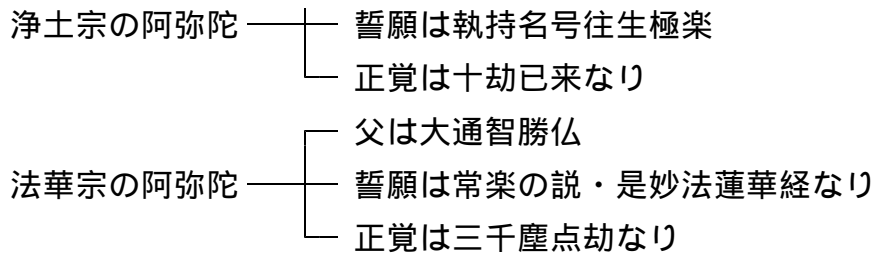
一 善導和尚自害の事

類聚伝に云はく「導、此の身諸苦に逼迫せられて情偽反易し、暫くも休息すること無し。乃ち所居の寺の前の柳樹に登りて、西に向つて願つて云はく、仏の威神驟以て我を摂し、觀音勢至も亦來たつて我を助けたまへ。此の心をして正念を失はざらしめ驚怖を起さず。弥陀の法の中に於て以て退墮を生ぜざらんと。願し畢つて其の樹の上に極まり身を投じて自ら絶えぬ」と。

一 仏自害断食身根不具を禁ずる事

涅槃の七に云はく「若し説ひて言ふこと有らん。常に一の脚を翹げて寂黙として言はず。淵に投じ火に赴き、自ら高巖より墜ち嶮難を避けず、毒を服し食を断じ、灰土の上に臥して自ら手足を縛し、衆生を殺害して方道呪術す。旃陀羅子・無根・二根・及び不定根・身根不具ならん。是くの如き等の事、如来悉く出家して道を為すことを聴したまふといはゞ、是を魔説と名づく」云云。涅槃經の六に云はく「大乘を学する者は肉眼有りと雖も名づけて仏眼と為す。耳鼻五根も例して亦是くの如し」云云。像法決疑經に云はく「諸の悪比丘、我が意を解せず、己が所見を執して十二部經を宣説し、文に随つて義を取り、決定の説と作さん。当に知るべし、此の人は三世の諸仏の怨なり。速やかに我が法を滅せん」云云。涅槃經の十四に云はく「如来世尊は大方便有り。無常を常と説き、常を無常と説き、樂を説いて苦と為し、苦を説いて樂と為し、不淨を淨と説き、淨を不淨と説き、我を無我と説き、無我を我と説き、非衆生に於て説いて衆生と為し、實の衆生に於て非衆生と説き、非物を物と説き、物を非物と説き、非實を實と説き、實を非實と説き、非境を境と説き、境を非境と説き、非生を生と説き、生を非生と説き、乃至無明を明と説き、明を無明と説き、非色を色と説き、色を非色と説き、非道を道と説き、道を非道と説く」云云。

┌ 父は月淨轉輪王 鼓音声陀羅尼經の説なり



薬王品に云はく「若し女人有って、是の經典を聞いて説の如く修行せば、此に於て命終して即ち安樂世界・阿弥陀仏・大菩薩衆の圍遶せる住処に往き、蓮華の中宝座の上に生ぜん」云云。疏記の十に云はく「若有女人等とは、此の中只是の経を聞くことを得、説の如く修行すと云ふ。即ち浄土の因、更に觀経等を指すことを須ひざるなり。問ふ、如何が修行する。答ふ。既に如説修行と云ふ。即ち経に依って行を立つ。具には分別功德品の中に直ちに此の土を觀ずるに四土具足するが如し。故に此の仏身は即三身なり」云云。「自在所欲生」云云。方便品に云はく「舍利弗、如来は但一仏乘を以ての故に衆生の為に法を説きたまふ。余乗の若しは二若しは三有ること無し」云云。安樂行品に云はく「無量の国の中に於て乃至名字をも聞くことを得べからず」と。

陀羅尼品に云はく「汝等但能く法華の名を受持せん者を擁護せんすら福量るべからず」と。釈籤の一に云はく「名は即ち是体、文字は解脱なり」と。又云はく「次に経題を釈す。初めには妙法の両字は通じて本迹を詮し、蓮華の両字は通じて本迹を譬ふ」と。疏記の一に云はく「妙法の唱えは唯正宗のみに非ず、二十八品俱に妙と名づくが故に。故に品々の内に咸く体等を具し、句々の下に通じて妙名を結す」云云。薬王品に云はく「若し復人有って七宝を以て三千大千世界に満て、仏及び大菩薩・辟支仏・阿羅漢に供養せん。是の人の得る所の功德、此の法華経の乃至一四句偈を受持する其の福最も多きには如かじ」云云。又云はく「能く是の經典を受持すること有らん者も亦復是くの如し。一切衆生の中に於て亦為れ第一なり」と。又云はく「此の経は能く一切衆生を救う者、此の経は能く一切衆生をして諸の苦惱を離れしむ。此の経は能く大いに一切衆生を饒益して其の願を充滿す」と。勸発品に云はく「若し復是の經典を受持する者を見て其の過惡を出ださば、若しは実、若しは不実にもあれ、此の人は現世に白癩の病を得ん。若し之を輕笑すること有らん者は当に世々に牙齒疎く欠け、醜唇平鼻、手脚繚戾し、眼目角睐、身体臭穢にして惡瘡膿血、水腹短氣、諸惡の重病あるべし。是の故に普賢、若し是の經典を受持する者を見ては、当に起って遠く迎ふべきこと、当に仏を敬ふが如くすべし」と。

涅槃経の十三に云はく「我爾の時に於て思惟し坐禅し、無量歳を経れども亦如来出世の大乗経の名有ることを聞かず」と。文句の五に云はく「所以は経に出でたり。人の語を信ずることなかれ」と。同三に云はく「縦令百千種の師あって一々の師百千種の説を作すとも是權ならざるは無し。如来の所説有る、尚復是權なり。況んや復人師をや。寧ろ權に非ざることを得んや。前に出づる所の如きは悉く皆權なり」と。

一 念仏者謗法罪を作る事

法然せんちやくの撰せん撰せんに云はく「道綽だく禪師ぜんし聖道せいどう・浄土じやうとの二門にもんを立て、聖道せいどうを捨て、正しく浄土じやうとに帰するの文。初めに聖道門せいどうもんといふは之に就いて二有り。乃至、之に准じて之を思ふに、応に密大及び実大を存すべし。然れば則ち今真言しんごん・仏心ぶつしん・天台たいたい・華嚴けわげん・三論さんろん・法相ほふさう・地論ぢろん・撰論せんろん、此等の八家の意正しく此に在り。浄土宗じやうとそうの学者がくしや先すべからづ須すべからく此の旨を知るべし。設たひ先に聖道門せいどうもんを学するの人なりと雖も若し浄土門じやうともんに於て其の志有らん者は須すべからく聖道せいどうを棄て、浄土じやうとに帰すべし。善導ぜんどう和尚わうしやう正しやう雜ぞう二行にぎやうを立て、雜行ぞうぎやうを捨て、正行しやうぎやうに帰するの文。第一に読誦よきよみ雜行ぞうぎやうといふは上の觀經くわんぎやう等の往生おんじやう浄土じやうとの經を除いて已外の大小乘だいしやうじやう顯密けんみつの諸經しよぎやうに於て受持じゆぢし読誦よきよみするを悉く読誦よきよみ雜行ぞうぎやうと名づく。乃至、第三に礼拝らいはい雜行ぞうぎやうといふは、上の彌陀みだを礼拝らいはいするを除いて已外いがいの一切諸余いっけつしよじよの仏菩薩ぶつぼさつ等及び諸しよの世天せいてん等に於て礼拝らいはいし恭敬くぎやうするを悉く礼拝らいはい雜行ぞうぎやうと名づく。第四に稱名しやうみやう雜行ぞうぎやうといふは、上の彌陀みだの名号なごうを稱するを除いて已外いがいの自余一切じじよいっけつの仏菩薩ぶつぼさつ等及び諸しよの世天せいてん等の名号なごうを稱するを悉く稱名しやうみやう雜行ぞうぎやうと名づく。第五に讚歎さんたん供養きやうやう雜行ぞうぎやうといふは、上の彌陀みだを除外じがいの一切諸余いっけつしよじよの仏菩薩ぶつぼさつ及び諸しよの世天せいてん等に於て讚歎さんたんし供養きやうやうするを悉く讚歎さんたん供養きやうやう雜行ぞうぎやうと名づく。乃至、此の文を見るに彌いよいよ須すべからく雜ぞうを捨て、專せんを修すべし。豈百即百生の專修せんじゆの正行しやうぎやうを捨て、堅く千中無一の雜修ぞうじゆ雜行ぞうぎやうを執せんや」と。又云はく「貞元入藏録ていげんにじやうざんろくの中に始め大般若經だいぱんがぎやう六百卷より終はり法常住ほふぢやうぢゆう經に至るまで、顯密けんみつの大乗だいじやう經總て六百三十七部、二千八百八十三卷なり。皆須すべからく読誦よきよみ大乘だいじやうの句くに撰せんすべし。夫速やかに生死しんじを離れんと欲せば、二種の勝法しやうぽうの中且かつく聖道門せいどうもんを閣さしおいて選んで浄土門じやうともんに入れ。浄土門じやうともんに入らんと欲せば、正雜しやうぞう二行にぎやうの中に且かつく諸しよの雜行ぞうぎやうを抛なげうって選んで正行しやうぎやうに帰すべし」云云。大論だいろんに云はく「自法じほふ愛染あいぜんの故に他人たにんの法ほふを毀きしせば、持戒ぢけいの行人ぎやうじんと雖も地獄ぢごくの苦くるしみを脱れず」云云。法華經ほふけに云く「当来世たうらいぜの悪人あくにんは仏ぶつの一乘いっじやうを説きたまふを聞いて迷惑みわくして信受しんじゆせず。法ほふを破やぶして悪道あくだうに墮おせん」と。又云はく「法ほふを破やぶして信しんぜざるが故ゆゑに三惡道さんあくだうに墮おちなん」と。双觀しやうくわん經ぎやうに云はく「設たひ我われ佛ぶつを得えんも、十方じつぱうの衆生しゆじやう至心しじんに信樂しんがくして我が国わがくにに生なぜんと欲ほつして、乃至十念じゆじゆせんに若し生なぜずんば正覺しやうがくを取らじ。唯ただし五逆ごぎやくと誹謗ひぼう正法しやうほふを除く」と。譬喩品へいごひんに云はく「若し人にんあつて信しんぜずして此こゝの經ぎやうを毀謗きぼうせば則ち一切世間いっけつせけんの佛種ぶつじゆを断たぜん。其そのの人命にんめい終つひして阿鼻獄あびじやくに入り、一劫いつせきを具足きそくして劫せき尽つきなば更生ません。是こゝの如ごとく展轉てんてんして無む数すう劫せきに至らん」と。文句ぶんくに云はく「今經いまぎやうに小善成佛せうぜんじやうを明あかす。此緣因こゝろいんを取とつて佛種ぶつじゆと為なす。若し小善成佛せうぜんじやうを信しんぜずんば則ち一切世間いっけつせけんの佛種ぶつじゆを断たずるなり」云云。

一 真言師謗法罪を作る事

秘藏ひぞう宝鑰ほうやくの上に云はく、十住心じゆぢゆしんとは

一 <small>い</small> に異生 <small>いしやう</small> 羝羊 <small>ていじやうしん</small> 心 <small>しん</small>	凡夫 <small>ぼんぷ</small> 悪人 <small>あくにん</small>	二 <small>に</small> に愚童 <small>ぐどう</small> 持齋 <small>ぢさい</small> 心 <small>しん</small>	凡夫 <small>ぼんぷ</small> 善人 <small>ぜんにん</small>
三 <small>さん</small> に嬰童 <small>ようどう</small> 無畏 <small>むゐ</small> 心 <small>しん</small>	外 <small>がい</small> 道 <small>だう</small>	四 <small>し</small> に唯蘊 <small>ゆいん</small> 無我 <small>むが</small> 心 <small>しん</small>	声 <small>せい</small> 聞 <small>もん</small>
五 <small>ご</small> に拔業 <small>はつごう</small> 因種 <small>いんしゆ</small> 心 <small>しん</small>	縁 <small>えん</small> 覺 <small>がく</small>	六 <small>ろく</small> に他縁 <small>たえん</small> 大乘 <small>だいじやう</small> 心 <small>しん</small>	法 <small>ほふ</small> 相 <small>さう</small> 宗 <small>そう</small>
七 <small>しち</small> に覺心 <small>かくしん</small> 不生 <small>ふしやう</small> 心 <small>しん</small>	三 <small>さん</small> 論 <small>ろん</small> 宗 <small>そう</small>	八 <small>はち</small> に如實 <small>じよじつ</small> 一道 <small>いちだう</small> 心 <small>しん</small>	法 <small>ほふ</small> 華 <small>け</small> 宗 <small>そう</small>

九に極無自性心 華嚴宗

十に秘密莊嚴心 真言宗

又云はく「他縁以後は大乗の心なり。大乘において前の二は菩薩乘、後の二は仏乘なり。此くの如きの乗々は自乗には仏の名を得れども後に望むれば戲論と作る」云云。又云はく「人を謗じ法を謗ずれば定めて阿鼻獄に墮ちて更に出づる期無し。世人斯の義を知らずして、舌に任せて輒く談じて深害を顧みず。寧ろ日夜に十悪五逆を作るべくとも、一言一語も人法を謗ずべからず」云云。大日經に云はく「仏不思議の真言相道の法を説くに、一切の声聞縁覺を共にせず。亦普く一切衆生の為にするに非ず」と。法華經の二に云はく「汝等若し能く是の語を信受せば、一切皆当に仏道を成ずることを得べし。是の乗は微妙にして清淨第一なり」云云。又云はく「此の法華經は是諸の如来の第一の説、諸説の中に於て最も為れ甚深なり」と。又云はく「此の法華經は諸仏如来の秘密の蔵、諸經の中に於て最も其の上に在り」と。六波羅密經に五蔵五味を説く。

私に云はく、此の經は天台御入滅已後百余年に天竺より漢土に来たれり。爾れば見ざる經の醍醐を盗むと書くは謬失なり。弘法の二經論の下に云はく「喩して曰く、今斯の經文に依らば、仏五味を以て五蔵に配当し、總持を醍醐と稱し、四味を四蔵に譬へたまへり。振旦の人師等争って醍醐を盗みて各自宗に名づく。若し斯の經を鑑みる則んば掩耳の智、剖割を待たず」云云。又云はく「毘盧遮那經の疏に順ぜば阿字を釈す」云云。私に云はく、毘盧遮那經疏供養法の卷は竜樹入滅已後八百年の造疏なり。而るに菩提心論に此の事を引き載せたり。故に知んぬ、菩提心論は竜樹の釈に非ざることを。又云はく「唯真言の法の中にのみ即身成仏するが故に是三摩地の法を説く。諸教の中に於て欠いて書せず」云云。

一 真言は別仏の説に非ざる事

大日經の一の卷の五仏は、中央は大日如来と説く。同五卷の五仏は、中央は毘盧遮那と説く。第一の卷の五仏は、中央は釈迦牟尼仏と説く。文句の九に云はく「普賢觀は法華を結成す」と。文に云はく「釈迦牟尼仏を毘盧遮那と名づく」と。乃ち是異名なり。別体に非ざるなり。安然の教時義に云はく「真言宗の本地毘盧遮那は即ち天台宗の妙法蓮華經最深密処と同仏なり」と。智証大師の授決集に云はく「真言・禪門・華嚴・三論・唯識・律宗・成・俱の二論等は、若し法華涅槃等の經に望むれば是 撰引門なり」云云。金剛頂經に云はく「婆伽梵釈迦牟尼如来、一切平等に善く通達するが故に、一切方を平等に觀察して四方に坐したまふ。不動如来・宝生如来・觀自在王如来・不空成就如来」云云。大日經普通真言蔵品の四に云はく「時に釈迦牟尼世尊宝処三昧に入って自心及び眷屬の真言を説きたまふ」文。大日經の第二に云はく「我昔道場に坐して、四魔を降伏し、大勤勇の声を以て衆生の怖畏を除く。是の時梵天等心に喜び共に稱説す。此に由つて諸の世間号して大勤勇と名づく。我本不生を覺る」云云。前の唐院金剛頂經の疏に云はく「成仏以来甚大久遠なり。未だ所經の劫数を説かざる所以は、經に於て各傍正の義有り。故に彼の法華の久遠の成仏も亦是此の經の毘盧遮那仏と異解すべからず」云云。

仏法伝来の次第に云はく「大師智拳印を結びて南方に向かふ。面門俄かに開けて金色の毘盧遮那と成り即便ち本体に還歸す」云云。涅槃經の七の巻に「仏迦葉に告げたまはく、我般涅槃して七百歳の後、是の魔波旬漸く当に我が正法を壊乱すべし。乃至化して阿羅漢の身及び仏の色身と作らん。魔王此の有漏の形を以て無漏の身と作りて我が正法を壊らん」云云。

一 禅宗謗罪を作す事

円覚經に云はく「修多羅の教は月は標す指の如し」文。方便品に云はく「或は修多羅を説く」「衆生に随順して説く。大乘に入るに為れ本なり」と。梵天王問仏決疑經に云はく「梵王靈山会上に至って、金色の沙羅華を以て仏に献り、仏群生の為に法を説きたまへと請ず。世尊、座に登り華を拈じて衆に示して青蓮の目を瞬す。天人百万悉く皆措くこと罔し。独り金色の頭陀破顔微笑す。世尊の云はく、吾に正法眼蔵・涅槃妙心・実相微妙の法門有り。文字を立てず、教外に別伝し、摩訶迦葉に付囑す」云云。是は中天竺なり。仏の御入滅は北天竺拘尸那城なり。涅槃經の一に云はく「爾の時に閻浮提の中の比丘・比丘尼一切皆集まる。唯尊者摩訶迦葉・阿難の二乗を除く」と。同經の三に云はく「若し法宝を以て阿難及び諸の比丘に付囑せば久住することを得ず。何を以ての故に、一切の声聞及び大迦葉は悉く当に無常なるべし。彼の老人の他の寄物を受くるが如し。是の故に応に無上の仏法を以て諸の菩薩に付囑すべし」云云。像法決疑經に云はく「諸の悪比丘或は禅を修すること有るも經論に依らず。自ら己見を逐ふて非を以て是と為し、是邪是正と分別すること能はず。遍く道俗に向かつて是くの如き言を作さん。我能く是を知り我能く是を見ると。当に知るべし、此の人は速やかに我が法を滅せん。乃至、地獄に入ること猶箭を射るが如し」云云。弘決の一の下に云はく「世人多く坐禅安心を以て名づけて発心と為す。此の人都て未だ所縁の境を識らず。所期の果無ければ全く上求無し。大悲を識らざれば全く下化無し。是の故に発心は大悲より起こるなり」云云。天台の止観の五に云はく「又一種の禅人他の根性に達せずして純ら乳葉を教ふ。体心踏心、和融覺覓、若しは泯若しは了、斯れ一轍の意なり。障難万途紛然として識らず。纔かに異相を見て即ち是道と判ず。自ら法器に非ず。復他に匠たるを欠く。盲跛の師徒二俱に墮落す。瞽瞍の夜遊甚だ憐愍すべし」云云。弘決の一に云はく「世人教を蔑ろにし理觀を尚ぶは、誤れるかな誤れるかな」と。方便品云はく「諸法実相、所謂諸法、如是相、如是性、如是体、如是力、乃至、如是本末究竟等」云云。妙樂大師の金錘論に云はく「実相は必ず諸法、諸法は必ず十如、十如は必ず十界、十界は必ず身土なり」云云。疏記の十に云はく「直ちに此の土を觀ずるに四土具足。故に此の仏身は即ち三身なり」云云。

一 権実証擲の事

玄義の二に云はく「則ち百法界千如是有り束ねて五差と為す。一に悪・二に善・三に二乗・四に菩薩・五に仏なり。判じて二法と為す。前の四は是権法、後の一は是実法」

云云。釈籤の二に云はく「九界を権と為し、仏界を実と為す」云云。秀句の下に云はく「定性と不定性は位の高下に依り、成仏と不成仏は經の権実に依る」と。文句の九に云はく「漸頓の益は虚なり」云云。記の九に云はく「権を稟^うけて界を出づるを名づけて虚出^{こしゅつ}と為す」云云。玄義の九に云はく「化他の因果は仏菩提を致すこと能はず。是の故に取^とって並べ用ひず。化他の権実も亦他をして極に至らしむること能はず。亦取るべからず」云云。止観の三に云はく「権の権は実の権に非ず、実の権と成ることを得べし。権の実は実の実に非ず、実の実と成ることを得べからず」云云。

一 権実分別の事

一に玄義の一に云はく「蓮の為の故に華、実の為に権を施すを譬ふ。権は即ち是苗なり。文に云はく、種々の道を示すと雖も其れ実には仏乗の為なり」云云。二に又云はく「華敷^{けふ}は権を開するを譬ふ。蓮現^{れんげん}は実を顕はすを譬ふ。権実共に稻なり。文に云はく、方便の門を開いて真実の相を示す」云云。三に又云はく「華落^{けらく}は権を廢するを譬ふ。蓮成は実を立つるを譬ふ。実独り真米なり。文に云はく、正直に方便を捨て、但無上道を説く」云云。釈籤の一に云はく「開廢^{かいはいくじ}俱時なり。開の時已に廢するが故なり」云云。又云はく「開の時即ち廢す」と。又云はく「既に実を識り已れば永く権を用ひず」云云。

一 破三顯一の事

方便品に云はく「一仏乘に於て分別して三と説く」云云。玄義の九に云はく「廢三顯実」と。又云はく「施権」と。方便品に云はく「二も無く亦三も無し。仏の方便の説を除く」云云。涅槃經の二十三に云はく「実には三乘無し。顛倒^{てんどうしん}心の故に三乘有りと言ふ。一実の道は真実にして虚しからず。顛倒心の故に一実無しと言ふ」云云。方便品に云はく「尚二乘無し、何に況んや三有らんや」云云。

一 入如来慧の事

法華經に云はく「是の諸の衆生世々より已来常に我が化を受く。此の諸の衆生始めて我が身を見、我が所説を聞いて、即ち皆信受して如来の慧に入る。先より修習して小乗を学する者を除く」云云。文句の九に云はく「根利にして徳厚し。世々已来常に大化を受け、始めて我が身を見、即ち華嚴を稟^うけて如来の慧に入る。菓熟して零^おち易し」云云。釈籤の十に云はく「当に知るべし、法華を部に約するときは則ち華嚴般若を破す」云云。

一 余深法中の事

囑累品に云はく「若し衆生有^{じきょうりき}って信受せざらん者には、当に如来の余の深法の中に於て示教利喜すべし」と。文句の七に云はく「示教利喜。示は即ち示轉、教は即ち勸轉、利喜は即ち証^{しょうてん}轉なり」と。玄義の六に云はく「余とは方便を帶するなり。深とは中道を明かすなり。方便を帶して中道を明かすは即ち別教なり」云云。又云はく「但、為に^う実を弘むるに而も衆生信ぜず。須く実の為に権を施すべし」と。釈籤の六に云はく「有^{じんぶよ}深復余とは即ち別教の法なり。入地を深と名づけ地前を余と名づく」云云。文句の十に云はく「汝能く余の深法を以て^{ぶって}仏慧を助申せば、即ち善巧^{ぜんぎょう}に仏の恩を報ず」云云。疏記

の十に云はく「以偏助円は則ち此の意なり。此の経の上一切皆然なり。人之を見ずして三乗有りと謂ふは謬れり」云云。

一 三種教相の事

玄義に「教相を三と為す。一に根性の融不融の相、二に化道の始終不始終の相、三に師弟の遠近不遠近の相」云云。釈籤の一に云はく「前の両意は迹門に約し、後の一意は本門に約す」云云。寂滅道場を以て元始と為す。方便以下の五品の意なり。

第一の根性融_法不融_前の相

華嚴・阿含・方等・般若・法華各得道有り、種熟脱を論ぜず。

釈籤の一に云はく「又今文の諸義は凡そ一々の科、皆先づ四教に約して以て麤^{そみょう}妙を判ずるときは、則ち前三を麤と為し後一を妙と為す。次に五味に約して以て麤^{そみょう}妙を判ずるときは、則ち前四味を麤と為し醍醐を妙と為す。全く上下の文意を推求せずして直ちに一語を指して法華は華嚴より劣れりと謂へるは幾許^{いくばく}の誤りぞや誤りぞや」云云。

華嚴は一麤一妙	相待妙	——	麤妙を判ず
阿含は単麤	無	妙	
方等は三麤一妙	相待妙	——	麤妙を判ず
般若は二麤一妙	相待妙	——	麤妙を判ず
法華は二妙有り	相待妙	——	麤妙を判ず
	絶待妙	——	麤を開して妙を顕はす

釈籤の十に云はく「唯法華に至って前教の意を説いて、今教の意を顕はす」と。玄義の二に云はく「此の妙彼の妙、妙の義殊なること無し^{約教相對。前三を麤と為し後一を妙と為す。}但、方便を帯すると方便を帯せざるとを以て異と為すのみ^{約部相對。前四味を麤と為し醍醐を妙と為す。}」云云。同十に云はく「初後の仏慧円頓の義^{ひと}斎し^{一住の}釈。文句の五に云はく「今の如く始めの如く、始めの如く今の如し。二無く異無し」云云。弘決の五に云はく「惑者未見とは尚華嚴を指す。唯、華嚴円頓の名を知って、彼の部の兼帯の説に味し。全く法華絶待の意を失ふ」云云。釈籤の二に云はく「故に諸味の中、円融有りと雖も全く二妙無し」と。同三に云はく「若し但四教の中の円を判じて之を名づけて妙と為せば、諸経に皆是くの如きの円義有り。何ぞ妙と称せざる。故に須く復更に部に約し味に約して方に今経の教も円、部も円なることを顕はすべし。若し教に約せざれば則ち教の妙を知らず。若し味に約せざれば則ち部の妙を知らず」と。爾前の相待妙とは「前三^{蔵通}を麤と為し、後一^円を妙と為す」云云。法華の相待妙とは「前四味^{華嚴・阿含・方等・般若}を麤と為し、醍醐を妙と為す。三千塵点大通を以て元始と為す」と。

第二化導始_中終_{靈山}不始終の相

化城^{けじょう}喩品^{ゆほん}の意なり 種熟脱を論ず 種は大通なり 熟は中間乃至今日の四味なり 脱は今の法華なり

玄の一に云はく「異とは、余経は当機益物にして如来施化の意を説かず。此の経は仏の教を設けたまふ元始巧みに衆生の為に頓漸不定顕密の種子を作すを明かす」云云。釈籤の一に云はく「漸及び不定に寄すと雖も余経を以て種と為さず。故に巧為と云ふ」と。止観の三に云はく「若し初業に常を知るを作さずんば、三蔵の歸戒羯磨悉く成就せず」と。弘決の三に云はく「今日の声聞禁戒を具することは、良に久遠の初業に常を聞くに由る。若し昔聞かずんば小尚具せず。況んや復大をや」云云。弘決の三に云はく「若し全く未だ曾て大乘の常を聞かずんば既に小果無し。誰か禁戒の具不具を論ぜんや」云云。又云はく「羯磨不成と言ふは、所謂、久遠に必ず大無くんば則ち小乗の乗る法を成ぜざらしめん。本無きを以ての故に諸行成ぜざること樹の根無ければ華菓を成ぜざるが如し。時機未だ熟せず、権に小の名を立つ。汝等の行ずる所是菩薩の道、始めて記を得て方に大人と名づくるに非ず」と。釈籤の一に云はく「法譬二周得益の徒は往日結縁の輩に非ざること莫し」云云。

五百塵点 久遠を以て元始と為す

寿量品の意なり

五百塵点 靈山の間

第三に師弟の遠近不遠近の相

種熟脱を論ず 種は久遠 熟は過去 脱は近く世々番々の成道 今日の法華なり

玄義の一に云はく「又衆経咸云はく、道樹にして師の実智始めて満じ、道樹を起って始めて権智を施すと。今の経は師の権実道樹の前に在って久々に已に満ずと明かす。諸経に二乗の弟子は実智に入ることを得ず、亦権智を施すこと能はざること明かす。今の経には弟子の入実は甚だ久しく、亦先より解して権を行ずることを明かす。又衆経は尚道樹の前の師と弟子との近々の権実を論ぜず。況んや復遠々をや。今の経は道樹の前の権実長遠なることを明かす。補処世界を数ふるに知らず。況んや其の塵数をや。経に云く、昔未だ曾て説かざる所、今皆当に聞くことを得べし。慇懃に称讚すること良に所以有るなり。当に知るべし、此の経は諸経に異なることを」と。釈籤の一に云はく「二乗、猶小果に住す。故に不入と云ふ。豈能く他を化せんや。故に権を施さず。次に今経を明かす。満願等の如き先に已に実に入る。説法第一なり。故に先より解して権を行ずることを」と。弘の七に云はく「過去下種は現在に重ねて聞いて成熟の益を得。未だ曾て下種せず、現在に種を成じ、未来に方に益す。故に三世の益皆法輪に因る」と。薬草喩品に云はく「汝等が所行は是菩薩の道なり。漸々に修学して悉く当に成仏すべし」云云。記の一に云はく「一時一説一念の中、三世九世、種・熟・脱の三あり」と。弟子品に云はく「諸の比丘諦かに聴け。仏子所行の道は善く方便を学せるが故に思議することを得べからず。衆の小法を楽って而して大智を畏るゝことを知る。是の故に諸の菩薩、声聞縁覚と作り、無数の方便を以て諸の衆生の類を化す」云云。又云はく「内に菩薩の行を秘し外に是声聞なることを現はす。小欲にして生死を厭へども実には自ら仏土を浄む。衆に三毒有ることを示す。又邪見の相を現す。我が弟子是くの如く方便して衆生を

度す」云云。方便品に云はく「大乘に入る、為れ本なり」云云。分別功德品に云はく「願はくは我未来に於て長寿をもって衆生を度さん」云云。玄義の七に云はく「但、本極ほんごくの法身微妙みみょうじん深遠なり。仏若し説かずんば弥勒尚暗し。何に況んや下地をや。何に況んや凡夫をや」云云。伝教大師の秀句の下に云はく「浅きは易く深きは難しとは釈迦の所判なり。浅きを去りて深きに就くは丈夫じょうぶの心なり。天台大師は釈迦に信順して法華宗を助けて震旦しんだんに敷揚し、叡山えいざんの一家は天台に相承して法華の宗を助けて日本に弘通す」云云。又云はく「謹みて法華經法師品の偈を案ずるに云はく、藥王、今汝に告ぐ、我が所説の諸經、而も此の經の中に於て法華最も第一なり已上經文。当に知るべし、斯の法華經は諸經の中に最も為れ第一なることを。釈迦世尊宗を立つるの言は法華を極と為す。金口の校量なり。深く信受すべきかな」と。